187 アルツハイマー型痴呆の早期発症と晩期発症による脳血流分布パターンの相違

羽生春夫，新井久之，阿部晋衛，中野正剛，高崎 優（東京医大老） 鈴木孝成，阿部公彦（東京医大放）

早期発症 (EAD) と晩期発症 (LAD) のアルツハイマー型痴呆について SPECT による脳血流分布パターンを比較検討した．両群とも80%以上の患者に側頭頭頂葉の血流低下がみられたが，EAD群の多くは両側側頭頭頂葉の限局的な低下を示し，LAD群では一側の側頭頭頂葉の低下や，より広範な血流低下を示すなど非定型的なパターンが多かった．MRIからLAD群では深部白質病変や皮質萎縮が多く，また非定型的な SPECT 所見を示したものでは皮質萎縮が高度にみられた．LADでは加齢に関連した大脳皮質の病理学的変性が非定型的脳血流分布パターンに影響している可能性が示唆された．

188 Binswanger型脳梗塞における痴呆と局所脳血流量

阿部晋衛、羽生春夫、新井久之、中野正剛、高崎 優（東京医大老） 鈴木孝成、阿部公彦（東京医大放）

広範な大脳深部白質病変を認めた脳梗塞患者をBinswanger型脳梗塞と称し，知的障害の程度と^{123}I-IMP SPECTによる局所脳血流量との関連を検討した。痴呆(-)群と痴呆(+)群との間で、MRI上のPVHやDWHM、基底核領域の梗塞巣の程度に差は認められなかった。しかし痴呆(+)群では脳萎縮が明らかであり，皮質脳血流量も局所的に有意な差を認め，平均脳血流量も(-)群49.2ml/100g/minに対し(+)群43.5と有意に低下していた。

広範な大脳白質病変を認めるBinswanger型梗塞では，脳萎縮や局所脳血流量の低下が知的機能障害と密接に関連していると考えられた。

189 Aphasia を合併した高血圧性脳内出血例の脳ＳＰＥＣＴについて

桂木 誠 （聖マリア病院 画像診断部）
鳥越隆一郎（同 脳神経センター）

失語を呈した左側被殻あるいは視床出血例における脳SPECT 所見について検討した。対象は視床出血７例，被殻被殻出血16例である。視床出血ではほぼ全例が健忘失語の状態であったが，SPECT 所見（左側頭葉の血流低下）は比較的軽微であった。被殻出血では軽度の健忘失語から全失語の状態まで種々の状態がみられた。SPECT でも外側皮質域の軽度の血流低下から半球ほぼ全域にわたる高度の低下までさまざまであった。皮質域の低下は，血腫の量や広がりを反映していると思われ，また失語の重症度やタイプと関連があると思われた。脳SPECT は失語評価の一指標になると思われた。

190 Parkinson症状を伴う変性疾患性痴呆症例の局所脳グルコース代謝

石井一成，佐々木將博，坂本 攝，山路 滋，北垣 一，紀田 利 (兵庫脳研・画像，放)，今村 徹（同・臨床）

比較的早期から典型的なParkinson症状と痴呆を呈する症例につき ^{18}F-FDG, PETを用いて局所脳グルコース代謝を測定し，代謝低下パターンについて検討した。

対象7例中，一次感覚運動野を除く大脳皮質の広範な代謝低下型（前頭葉～後頭葉内側面を含む）3例，明らかな左右差のある低下型3 例，前頭葉優位の低下型1例であった。今回の対象はAlzheimer病や痴呆を伴うParkinson病とは異なる所見を呈しており，diffuse Lewy body diseaseやCorticobasal degenerationなど認知機能障害とparkinson症状を合併し得る他の疾患を含んでいる可能性があると考えられた。

191 閉塞性脳血管障害における視床および基底核の循環予備能の評価

大山洋一 冨口静二 辻 明徳 吉良光子 吉良朋広
中島留美 高橋睦正（熊大放）

片側性および両側性病変群における視床および基底核の循環予備能に両群で差があるかどうかを検討するために、内頚または中大脳動脈等の閉塞性脳血管障害例１４例（片側群８例、両側群６例）にDiamox 負荷I-123 IMPシンチグラフィを２日法で施行した。

基底核の予備能の低下は、片側群で２例（２５％）に認め、両側群では３例（５０％）に認めた。視床では、片側群では予備能の低下は認めなかったのに対し、両側群では３例（５０％）に予備能の低下を認めた。両側性病変で皮質に左右差がない場合には視床の予備能の低下は両側性病変の存在を疑わせる所見として有用と考えられた。

192 一過性脳虚血発作を呈する小児もやもや病患者における局所脳循環予備能

――― 現在虚血発作のない患者との比較 ―――

石田麻里子、清家裕次郎、松本昌泰、鎌田武信（阪大一内）、橋川一雄、奥 直彦、森脇 博、植原敏勇（同放射線部）、小高隆平、永井利三郎（同小児）、藤田昌宏、西村恒彦（同トレーサ）

内頚動脈灌流領域に狭窄性病変を有する小児型もやもや病患者の脳循環予備能についてSplit dose I-123 IMP SPECT法を用いて検討を行った。患者は脳虚血症状で発症し、小児型もやもや病と診断された25例である。全例にAcetazolamide20mg/KgBWを静注し、その前後での血流分布と局所の集積変化とから局所の血流増加率を求めた。最近一年間に一過性脳虚血発作を呈した患者群と虚血症状のない患者群とに分けて局所的に脳循環予備能の評価を行った。

Presented by Medical*Online